

ブラック・ブレット
伊熊将監に転生した
男一

赤沢錦

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

幼少の頃からの夢だった電撃文庫の編集者になつた一人の青年。しかし彼は見ず知
らずの少年を底い交通事故で不幸にも命を落としてしまう。死後、彼は天使を名乗る男
から「転生しませんか?」と言う提案を持ち掛けられる。一も二も無く快諾する青年だ
が、転生先は愛読していたライトノベルであるブラック・ブレットの世界、転生した人
物はなんと登場人物の一人、伊熊将監で・・・・!?

目次

プロローグ ～ありとあらゆる全ての始まり

新人類創造計画

新人類の力

12 7 1

プロローグ～ありとあらゆる全ての始まり～

東京都某所。何処にでもあるようなマンションに、何処にでもいるような一人の少年が住んでいた。特に際立つた才能があるわけではない、勉強も運動もそれなりにできて、運動の方がすこし得意な、何処にでもいる少年だ。

だが少年は読書、取り分けライトノベルを好んで読んだ。活字と言う媒体の中で躍動する少年少女達に、心奪われたのだ。

そんな彼を周りの人間は忌避し、軽蔑したが、少年は気にしなかつた。そんな事を気にしている時間が惜しかったのだ。作品の中の技を再現したいと体を鍛えていたことも、それによつて周囲の人達が明確ないじめを行うことが出来なかつたのも少年がそう考える理由の一端だつた。

とは言え彼も人間である。人並みに悩み、誰かを気遣い、誰かの為に怒り、誰かの為に涙した。

少年は高校生になり、青年へと成長をはじめた。元々頭はそう悪く無いので、それなりの数友人を作り、時に誰かと敵対して、充実した生活を送つた。

その頃、彼は真剣に自らの夢、なりたいものは何かと考えた。今まで漠然と小説の編

集者になりたいと思っていたが、それで食べて行くのは難しいと言わざるを得ないだろう。いつかは社会に出て働くかねばならない。とは言え、自らが決めた仕事でなければきっと長続きしないだろう。そこで少年は、自らが愛するライトノベルに携わる仕事に就きたいと考えた。

大学を出て、心も体もすっかり大人になつた彼は、遂に念願であつた電撃文庫の編集者になつた。少年の熱意が人を動かした瞬間だつた。

しかし、ここで神は残酷な審判を下す。

徒歩で事務所に向かう途中、何度も横断歩道を渡る事になる。その途中で、黄色い帽子を被つた幼稚園児程度の男の子に向かつて、猛スピードでトラックが突つ込んできたのだ。

「危ない！」

青年は男の子を突き飛ばし、そのまま自らも逃げようとした。が、トラックはその凄まじいスピードのまま、青年をボールのように吹つ飛ばした。天と地が急速に入れ代わつては元に戻る。堅い地面が迫るのを感じつゝも、青年は男の子の安全を確かめ、優しく微笑んだ。

ぐしゃり。人体が発するとは思えない音を立て、青年は死んだ。潰れた蛙のようなそ

の屍が、心優しき未来ある青年の末路だつた。だが・・・・・・

気が付くと、何か会社らしき場所で、青年はパイプ椅子に腰掛けっていた。自分は男の子を庇つて死んだはずでは……と目を白黒させていると、奥の扉から一人の男性が現れた。

「いやいや、すいませんね、急にこんなところに来て、びっくりしてるでしょう？ですがこれもちゃんとした手続きでしてね、我慢して下さい」

中肉中背、七三に分けた黒髪。一見、と言うか何処からどう見てもサラリーマンだ。ときぱきとこちらに書類を差し出してくる姿も、契約書にサインをしてもらうサラリーマン以外の何者でもない。

「あの……ここは？俺は事故で死んだんじゃないですか？」

「はい、そうですよ？ですから今のあなたは魂だけの存在、かなり不安定な状態です。…………ああそうそう、これを渡し忘れてました。私、天国転生部部長のミカエルと申します」

とんでもないことを口にされた。どうやら目の前にいるこの七三のサラリーマンは、信仰の対象にすらなつてている大天使の一人らしい。

「と言ふ訳でして、貴方に転生して頂きたいのです。はつきり言いますと貴方の死は因果部のミスでして……まさか貴方が運命に割つて入るとは思いませんでしたよ。そのお詫びと言うことで、今の貴方の記憶を引き継いだまま転載させて頂きたま

す。 そうそう、特典はどうします？ ある程度の運命はこちらで『設定』出来ますが

「………… おいアンタ。 さつき運命に割って入つたなんて言つたが………… あの

子は死ぬ運命だつたのか？」

「察しが良いですね。 その通りですよ。 貴方のおかげで、あの子の運命は変わりました
がね。」

がたつ、と思わず立ち上がりそうになる。 だがミカエルはやれやれと肩を竦めると
「申し訳ありませんが、私達は神（うえ）の命令に従うだけなので」

「なら、俺が望む運命は俺の大切な人を守れる力を手に入れることだ。 それ以外は、何が
起ころうと構いやしない。」

怒りに震える手で何とかサインを済ませ、転生部部長ことミカエルに連れられて部屋
を出る。 これまた会社の廊下にしか見えない通路を歩いた後、階段を降りてエントラン
スに辿り着く。 さしづめ時空の狭間にでも存在しているのだろうか、ガラス製らしき自
動ドアの先には大きな何かが渦を巻いていた。

ミカエルは自動ドアの隣にある機械にカードキーを通すと音も立てずに扉が開く。

「それでは、良き人生を」

「あ、ありがとうございます」

固く握手を交わす。 青年の新しい人生が、今再び始まるとしていた。「そう言えば、

俺の転生先ってどこです……うわあああああ!?」外の渦に吸い込まれて行く青年を見送り、大天使は溜め息をつく。

「はあ、これであの世界が変わつてくれると良いんだが……」

次に目を覚ますと、転生し赤ん坊になつた青年は、驚きのあまり卒倒した。転生先の赤ん坊……この伊熊将監の存在が、この世界の全てを変えていく。

三歳から前の記憶はきれいさっぱり消し去つた。転生した彼は自らが伊熊将監に転生していること、つまりこの世界がブラック・ブレットの世界であると言う事に早々に気付き、後に握るであろう剣のために剣道を初めていた。閉鎖的な流派であるはずの天童流が将監を弟子に取つたのは、一重にミカエルの言う『設定』のおかげだろう。あくまで推測に過ぎないが、この今までいれば、自らが民警になる事も、千寿夏世がパートナーになる事も設定されているだろう。そう考えた将監は、どうにか言い繕つて天童助喜与の元で竹刀を振つているのだ。その程度で天童流の道場に潜り込めたことには、流石に『設定』の凄まじさに感嘆するばかりだつた。

「うむ。大分基本になれて来たな、将監よ。」

天童助喜与師匠は立派な顎髭を撫でながらにかつと笑う。彼が自分の頭を撫でるやり方は激しかつたが、同時にとても心地よかつた。

「失礼」

ふと、太く芯のある声が響いた。足袋を履き、音一つ立てずに滑らかに移動する壮年の男。姿を見間違えるはずがない。天童菊之丞だ。

「助喜与殿。実はこの子にも戦闘術の手解きをしてくれんかな？」

そういって彼は後ろに手を伸ばすと、隠れていた男の子をそつと前に出した。・・・・・それが、変質したブラック・ブレットの世界での、伊熊将監と里見蓮太郎の出会いだつた。伊熊将監七歳、里見蓮太郎六歳の時である。ガストニア大戦が勃発する、ちょうど半年前のことだつた。

新人類創造計画

ついにガストニア大戦が始まった。小説の中でもそこまで詳しくは描写されていないので将監は知らなかつたが、その惨状を目の当たりにして、こんな小説には絶対書けないな、と身震いした。

おぞましきクリーチャーであるガストニア。その全てが恐ろしく執拗に人類を狙う。自衛隊の隊員も必死に応戦しているが、どうしたつて数が違い過ぎる。その戦線はジリジリと後退していくばかりだった。

一方その頃、将監は両親に連れられて民間のシェルターに身を隠していた。彼自身はあくまで民間人なのだから仕方ない。助喜与老人や蓮太郎もひどく心配していたが、流石に無理を通して政府用のシェルターに入れる訳には行かなかつたのだ。

「大丈夫よ将監、すぐに自衛隊の方が助けに来てくれるわ。だから、今は座つてなさい」
その頃はシエルターのバラニウム化も進んでおらず、既存のものに薄くコーティングが施された程度だつた。後に知つたのだが、シェルターに大した対策がされていなかつた事も犠牲者が増える一端だつたそうだ。
ひすつ。

何かが刺さった様な、異様な音がした。と思うと、シェルターがぶち破られ、全長六メートルはあろうかと言うおぞましきクリーチャーが侵入してきた。やはり、薄いコートeing程度では防ぎ切れなかつたのだ。

「な、何だよ……この化物」

一言で表現するのなら、『それ』は醜悪にカリチュアライズされた甲殻類だつた。地面を噛む足は節足動物特有の外骨格に覆われていて、円形をした口の中では唾液を撒き散らしながら力チャカチャと牙がうごめいている。どの生物がガストレア化したのかすら分からぬ異形。間違いなくステージII以降の強力なガストレアだ。そいつが足を一振りする度に、かなりの数の人が何メートルも吹っ飛び、地面に落ちて絶命していく。

一気に人々はパニックに陥つた。逃げようとする者、子供を庇つて抱き締める母親、有り合わせの物でバリゲードを作る者……しかし、将監が選んだのはそのどちらでもなかつた。

「みんな、逃げろっ！」

彼はシェルターの中に停車してあつたトラック（民間人を輸送する際に使う予定だつたのだろう、中身は空だつた）に忍び込み、それでガストレアに突つ込んだのだ。凄まじい勢いでエンジンをふかし、一瞬にしてガストレアをシェルターの外へ吹っ飛ばす。

丁度救援に来たのだろう、そのガストレアを近くにいた自衛隊が殲滅してくれた。

「よし！ やつ……」

た。と言い切ろうとした際、将監はごぼり。とねばつく血の塊を吐き出した。

「え……」

顎を引いて自分の胸元を見ると、直径十センチもある巨大な『杭』が二本、左右の肺を貫く形で刺さっていた。そう言えば……と、転生する前、大学での授業を思い出した。原始の甲殻類アノマカリスの一種は、自らの歯を高速で飛ばして獲物を捕らえると聞いた。何故その能力を持っていたかわからないが、これが『進化への跳躍』なのだろう。

「おい！ まだ子供だ！ ヘリはまだ来ないのか!?」

「さて！ 室戸先生に連絡しろ！ あの人じやなきやどうにもならないぞ！」

そんな言葉すら、遠く聞こえた。ミカエルの『設定』があるから、死にはしないだろう。とにかく……

将監は難儀しながらも首を動かし、シエルターを見た。かなりの数死傷者が出てたが、無事な人も多い。良かった……そう思いながら、将監は穏やかに目を閉じた。既に意識は無かつたので、事後承諾と言う形で手術は始まり、そのバラニウム製の『人工肺』は見事に将監と適合した。たった七歳の少年である事を考えれば、成功する可能

性はごくわずかとしか言えなかつたが、彼は生きるのを諦めなかつた。

「しかし天童閣下、よろしいのですか？ご養子の友人と聞きましたが、成功する確率はごくわずかでした。私としては試作型の実験が出来れば良いのですが、何故周囲の反対を押しきつてまで？」

「何、誰かがやらねばならん実験だ。こやつ程根性のある奴なら、大丈夫だと思つたまでのこと。それに……」

「それに？」

「可愛い養子（わがこ）と孫娘が悲しむ姿は、儂とて見たく無いのでな」

室戸董教授と、天童菊之丞の会話。この日、また『新人類』が一人、産み落とされた。陸上自衛隊東部方面隊第九二機械化特殊部隊『新人類創造計画』伊熊将監の誕生である。それから、十年・・・・・・世界の国々はガストレアに敗北し、人々はモノリスと呼ばれるバラニウムの塊の中に閉じ籠つて暮らしていた。

「全く、世界も変わつちまつたもんだ……」

モノリスによつて五つに分けられたエリアのひとつ、東京エリア。転生した伊熊将監は、東京エリアの片隅で『伊熊民間警備会社』を立ち上げていた。IP序列は、原作より二千位程下の三千二百七十二位。それなりに繁盛はしている。事務所を擁するビルの屋上で、ラジオを聞きながら将監は大きく伸びをした。

「将監さん、朝ごはんが出来ました。そろそろ降りて来て下さい」

磨りガラスの扉を開けて出てきた少女は、千寿夏世（せんじゅ　かよ）。頼れる頭脳派のイニシエーターだ。ショットガンなど銃火器の扱いに長け、近接戦闘に特化した将監を的確にサポートしてくれる。

「お、見てみろ夏世、最近仕事無かつたからな、あいつら張り切つてるぜ」

すぐ下を見下ろすと、線の細い青年がツインテールの少女と自転車の一人乗りで飛び出していく所だった。

伊熊民間警備会社。それを擁するビルのお隣は、天童民間警備会社を擁するハッピー・ビルディングなのだ。時たま差し入れをする。近所付き合いも上々である。

「ご飯が冷めてしまします。早く行きましょう」

「そうだな。飯にするか」

二人は手を繋ぎ、事務所へと帰つていった。

新人類の力

「なあ夏世、蓮太郎達どうなると思う?」

「将監さん、今は蓮太郎さん達じやなく自分の依頼に集中しましよう。動きはありますか?」

モノリスの周り、外周区と呼ばれる地域の廃ビルの屋上で、将監は双眼鏡を使い、モノリスによる結界の外側、未踏査領域を睨んでいた。森と草原との境目辺りで、一匹の『虎』が眠っている。『モデル・タイガー』、虎の因子を持つガストレアだ。それが、モノリスのすぐ近くに居座っている。将監たちの依頼は、このガストレアの駆除だ。

「正直、あいつは『タイガー』じゃなくて『キマイラ』なんじゃないかと思うがね……」無論ガストレア。人知を超えた化物に変わりは無い。サイズこそ大柄な虎と大差無いが（それでも一般的な人間と比べると十分大きい）なんと首の根本からもう一つ、巨大な角を持つた山羊の頭が生えている。その異形は、将監の言う通りギリシャ神話の怪物キマイラを連想させた。

「完全に眠つていいようですね……将監さん、行きましょう。おんぶして下さい」

そう言うと、夏世は将監におぶさつた。

「ＯＫ、飛ぶぞ、しつかり掴まれよ。」

将監の背中から、『翼』が生えた。それは、新人類創造計画によつて将監に与えられた人工肺に備わる力の一つ。大量の空気を吸い込み、それを圧縮。息として吐き出す代わりに背中の噴出口から噴き出す事で、文字通り『空を飛ぶ』のだ。

「よし、行くぞ……ツ！」

圧縮空気式スラスタ、展開。噴出口から噴き出す窒素と二酸化炭素の塊が、人二人を中空へと投げ出した。

「おおおおおおおおお！」

ガストニアの真上で急降下。夏世と将監、二人の体重とスラスタの推進力を乗せた大剣が、虎の頭部を叩き割らんと光るが、山羊の頭部が一瞬早く覚醒した。凄まじい勢いで頭を振るい、湾曲した角が将監を夏世ごと貫こうと迫る。

「ちつ！」

このまま差し違えては堪らない。瞬時に手首を返して刀身を寝かせ、鋭く尖った角を受け止めた。その衝撃で吹つ飛ばされるが、背中のスラスタで勢いを殺し、足から着地した。

「山羊覚醒の後、追つて虎も覚醒。反撃に移ろうとするも、覚醒直後のため隙ができる」
パツパツパツ。将監にガストニアが飛び掛かる寸前、空中で将監から離れた夏世が閃

光弾（フラツシユバン）を炸裂させた。瞬間三つの太陽が生まれ、虎と山羊、計四つの眼を完全に潰した。

「よくやつた夏世！」

山羊の角を防いだ際に視界を剣で塞ぎ、閃光弾を見なかつた将監は再度剣を振り被る。狙いは先程剣を防いだ山羊の首だ。

しかし、将監の剣はまたもガストレアに届かなかつた。

「んなつ!?

今度は虎の首が激烈に反応した。ほとんどバランスを崩すように姿勢を下げ、大剣の横薙ぎをかわす。その時に折り畳んだ足を伸ばし将監の首に飛び掛かる。長い犬歯から、黄色い液が滴り落ちた。

（不味い、やられ—————）

「将監さん！」

ガオン！と轟音を立て、夏世の散弾銃（ショットガン）が火を吹いた。バラニウム製のスラング弾が、牙を折り、皮膚を破り、目を抉つた。その瞬間、将監はスラスタを前に向け、全速力で飛び退いた。

「将監さん、無事ですか!?」

「ああ、助かつたぜ。しかしこいつ・・・・・『モデル・タイガー』じゃないな。多

分だが、未踏査領域で野生化した虎がガストレアウイルスに感染してガストレア化したんだ。しかし蛇の因子まで持つてゐるか……リアルキマイラじゃねえかよ畜生……」

恐らく閃光弾を受けても将監の斬撃に対応出来たのは蛇の因子によるピット器官によるものだろう。ただでさえ動物から変異したガストレアは厄介なのだ。

「どうします？」

「仕方ないさ。夏世、何か弱点とかないのか？」

んーと、顎に手を当てて考えてから、口を開く。

「恐らくですが、いくら頭が二つあるといつても脳は一つの筈です。山羊の頭は虎の体から生えてるから、脳があるのは虎の頭の方でしょう。私が山羊を引き付けますので、将監さんは虎を仕留めて下さい」

「OK。行くぞ……今だ！」

左右から二人同時に仕掛ける。跳躍した夏世のショットガンが火を吹く。至近距離で放たれた散弾が山羊に突き刺さり、下顎から先が吹き飛ぶ。勿論、その中に脳は無い。

「将監さん！」

「分かつてる！」

超バラニウム製の大剣が一閃。斜めに黒い光が走り、虎の頭部を完全に断ち割つていった。どす黒い血液が溢れだし、どう、と巨体が横倒しになる。いかにガストレアといえ

ど、脳をバラニウムで破壊されれば死は免れない。もう動き出すことはないだろう。依頼完了だ。警察に報告した後、報酬をもらわねば。

「ふう・・・・・今回は流石にひやりとしましたね。帰りましょう、将監さん」「そうだな。・・・・・つてまた飛ばなきやいけねえな・・・・・ああ面倒くさい」

「ふふ、将監さん、れでいーふあーすとですよ?さあ私をおぶつて下さい」

「へいへい・・・・・まずは警察署からだな、いくぞ夏世」

「いつでもどうぞ」

黒い翼から圧縮空気を吹かし、一組の民警ペアが東京エリアを飛翔した。